

フォトグラファー **Hiro Kimura**

「俺だからこそ、見せてくれるその人の顔を撮り続けたい」



矢沢永吉、桑田佳祐、浜崎あゆみなど、日本屈指のアーティストや東京コレクション等のスタイリングを手掛けるトップスタイリストとして名を馳せていた彼は、今から6年前、その輝かしいキャリアのすべてを手放し、写真の世界に飛び込み、フォトグラファーに転身した。

「もう一度、ゼロから這い上がって来ることができたら、きっと最高の写真が撮れる、そう思った」。彼の言葉通り、それは現実となった。レニー・クラヴィッツといった世界的セレブリティをはじめ、夏木マリ、渡辺謙、石原慎太郎、浅野忠信、佐野元春、吉川晃司、内田裕也、三浦春馬、石原さとみ、松山ケンイチ、水原希子など、名だたる“パワー・ペア”の美しい瞬間を次々ととらえ、世に送り出す

日々。

つい先日も、夏木マリがライフワークとして取り組む舞台「印象派」シリーズの新作「印象派NEO Vol.2 灰かぶりのシンデレラ」の公演を記念して、撮り下ろした写真集「CINDERELLA」が発売されたばかり。広告・雑誌界で引く手あまた、今や名実ともに華麗なる活躍をみせている。

力強く、繊細で、果てしなく美しい。今回は、比類なき世界観で、観る者を魅了するフォトグラファー・Hiro Kimura氏のインタビューをお届けしたい。

#01. 日本のファッション業界を背負うつもりで、この国に帰ってきた



—スタイリストとして活躍した20代を経て、フォトグラファーに転身されたのは30歳前後。思い切った決断は、年齢と関係するところがあったのですか？

区切りがいいので、単純にそうしてきたところもあるのですが、子供の頃から、目標をひとつ決めると同時に「何歳までに達成する」ということは、必ず決めていましたね。そうすれば、物事がおのずと動き出すからです。

21歳でニューヨークに行き、スタイリストとしてのキャリアをスタートしましたが、24歳で日本に帰ってきて活動をはじめるときも、「30歳までに、自分の目指す目標値まで必ずたどり着く」ということを自分に課していました。

その目標値って、何かというと、あるドキュメンタリー番組に出演した際、生意気で無鉄砲だった当時の僕は、追っかけ取材の中でこんな言葉を残しています。

「日本のファッション業界を背負うつもりで、この国に帰ってきたんだ」と。

—日本のトップを狙うということですよね？

そうなりますね。映像が手元に残っていて、今でもたまに見るんです。「よくもまあ偉そうに！」とその度に思いますが、ある意味、核心はついているなと。「目標値をできるだけ高く決めることが、現実に叶えるためには大切」だということを、それまでの経験から分かっていたんですよね。

学生時代の僕は、野球ひと筋のスポーツ少年だったんですが、「日本一になりたい」という目標を掲げた時、実際にたどり着けるのは、頑張っても、県大会優勝。それはそれで素晴らしいことですし、これはあくまで僕の実感ですが、もし日本一を目指すなら、「世界一になること」を目標にするべきだと思うんです。

それくらい、夢と現実には温度差があるし、高めに設定した方が、その温度差は、より早いスピードで、色濃く縮めていくことができるから。何をするにしても、僕は、もっと上を目指したかった。だから、スタイリストとして活動した20代も、基準をできるだけ高く持とうとしていましたね。そうすることで、自分の中にほとぼしるエネルギーを昇華しようとしていたんだと思います。

—転身される直前は、5人の弟子を抱え、月に30本以上の撮影をこなされていたそうですね。

とにかく忙しい毎日でした。矢沢永吉さんや桑田佳祐さんのスタイリングを手掛けさせていただいたのも、ちょうどこの頃です。さっきのドキュメンタリー番組に話を戻すと、僕は予言めいたことを言っていたんですよ。「今のペースで、モノを作り続けていたら、30歳になった時、俺はこの仕事を辞めているだろう」と。

その都度、できるかぎり最大限の力を出し切って、走り続けてきた20代。ある意味、スタイリストとしての沸点に達したんですね、自分の中で。色んな想いが走馬灯のように駆け巡りましたが、一旦、全部やめて、リセットしてみることにしました。それが6年前ですね。

#02. 十字架を背負っている人こそ、ありのままに美しい



—異分野でゼロから始めることに抵抗はなかったのですか？

抵抗がなかったといえば、嘘になるし、悩みあぐねた夜もあります。でも、職種を変えることよりも、

「人間としてもっと成長したい」という気持ちの方がずっと強かったですね。

転身することを考えはじめた頃、時期同じくして、“モンスター”たちとの出会いがありました。モンスターとは、さまざまなジャンルで活躍している超人たちのこと。理屈では語り尽くせない凄い人たちとの付き合いの中で、自分の小ささを痛感しました。「ああ、俺は凡人だな」って。

「彼らと同じ土俵に立つためには、何が必要なんだろう？」と考えた時、彼らにあって自分に足りないものは“人間力”だと思いました。人との関わり合いなしに、ひとりで仕事はできないけれど、逆に言うと、「ひとりの人間として、十分な力を持ち備えていれば、どんな世の中になっても、どこに行こうと、すべからず、いい仕事ができるだろうし、自分の思い描く未来を必ず実現できるだろう」—どこか、確信めいたものがありました。

あえて、きつい環境に身を置くことが、どれだけ自分の「宝」、そして「強み」になるかということを実感しました。特に30歳からの3年半の間は、本当の意味で、自分と“仲良し”になれた時間でしたね。その時間、人との出会い、すべてが、今の自分を形づくる肥やしになっています。

—Hiroさんにとって、「写真を撮る」という行為は、何を意味していますか？

「目の前の相手を美しく撮りたい」という愛情でもあり、その一方で、「自分を撮る」ことでもあると思っています。カメラを構える僕を見て、何らかの感情を抱く相手のその顔が、そのまま映るから、自分自身の投影でもあるわけです。そういった意味で、写真は、撮られる側と撮る側の共作ですし、常にそうでありたいとも思っています。

「私、キレイでしょう？」と完璧なまでに整えた姿や想定内の表情よりも、「俺だから見せてくれる顔」を撮りたいという欲望は、人一倍強いですね。自分のエッセンス、爪あとが息づく写真を残していくことは、その瞬間、その作品に責任を持つことと

くことは、その瞬間、その作品に責任を持つことと同義。だからこそ、「俺だから撮れる顔」にこだわり続けています。

—Hiroさんの思う「人間の美しさ」や「美しい人」について教えてください。

美しい人にかぎって、十字架を背負っている人が多いですね。それは人によってさまざまだけれど、肉眼では決して見えない十字架がバーンとあるんですよ。

まわりのみんなから愛されて、何不自由なく、順風満帆な人生というよりは、むしろ、人の愛が欲しくて、寂しくて仕方がなくって、物足りない気持ちや伝わらなかった思いを抱えている人、ドン底まで落ちこちて、煮詰まって、キツイ時期を過ごした人...、要は、コンプレックスや劣等感といったものを抱えながらもなお、何かを切望する欲望を持ち続け、情熱を燃やす人。そういう人は、美しいし、光があるし、輝きを放っていますよね。

だから、撮る時はいつも、「その人が背負っているものを感じることを大切にしています。一見、ネガティブなことに思えるかもしれませんが、すべてが整っているからといって、美しいとはかぎりません。人間は、悪いところがあってもいいんですよ。僕はそういうところに、人間としての美しさや色っぽさを感じます。

—相手の魅力を惹き出し、まるごと包み込むような器の大きさを感じます。

何か大きなものを背負っている人ほど、うまくコミュニケーションが取れなかったりしますし、目を合わせることもできない人もたくさんいます。でも、その奥底には、深い愛情や揺るぎない信念、あるいは夢への渴望など、素晴らしいものが潜んでいることが本当に多い。これは、経験からいえることです。

自分では、マイナスに感じている部分も、巡りめぐって、プラスに転化する。あるいは、マイナスのま

までも、十分に魅力を放っている。人間なんて、そんなものだし、だからこそ素敵なんです。

だから、僕は、相手がセンシティブであればあるほど、その人の背中にそっと手を伸ばして、さすってあげることのできる存在でありたい。マイナスの部分もひっくるめて。「そのまま、あなたは十分に美しい」、「美しい人生だね」と声をかけるように、シャッターを押す。言葉にしなくても、それがおのずと相手に伝わった時、とびきり魅力的なその人の顔が現れてくるから。それが、僕にとってのポートレートですね。

#03. 欲望と劣等感の清濁を併せ呑める人こそ、魅力的



—どんな少年時代を過ごされていたのか、Hiroさんの過去にも興味があります。

もしも、少年期の体験がいなければ、今の自分はなかったと言い切ってもいいと思います。冒頭で、ちらっと野球の話をしました。僕が通っていたのは、全国大会に出場するくらいの強豪校で、中学2年の時、キャプテンを務めていたんです。ところが、ある日を境に、放課後、グラウンドに行っても、キャッチボールしてくれる相手がいな。それどころか、学校じゅうから、壮絶ないじめに遭う身となりました。事の発端は、町のガキ大將的存在だったエースとのケンカ。彼がみんなを取り込んでしまったんですね。

自分の置かされた立場がいやでいやで、消えてしまいたいとさえ思いました。でも、これが、今となっては僕の宝になっています。居場所を失ったことで、確固たる自分の居場所を自分で作っていかうという「欲望」が芽生えたからです。

あの頃の劣等感や満ち足りない気持ち、**「絶対、負けるもんか」というチャレンジ**に変わり、そのチャレンジから少しの成功と多くの失敗が生まれ、失敗がまたエネルギーに変わる...この循環を幾度となく体感していくうちに、今いるところに辿り着いていました。つまり、人間の成長は、この繰り返しなんだと思います。

—「欲望」と「劣等感」は、背中合わせということですね。

はい。でも、これは僕だけでなく、どんな人にとってもいえることではないでしょうか。最近、ファッションやアート、写真とは全く違う分野の人とも、交流を深めているんですが、抜きん出た方ほど、強いコンプレックスや劣等感を持っていて、それを自分で認めたくて、さらに大きな欲望を抱き、成功されている方が多いように感じます。

今朝も、ある起業家の方にお会いしてきました。パーティで知り合ったあと、どうしてもちゃんとお話したくて、すぐに自分から連絡を取りました。その

方は20余の会社を経営する超多忙な大物。「君と共有できる時間はない」と言われたらそれで終わりですが、どうしても話してみたかったですよね。幸い、お会いすることができて、ポートレートも撮らせていただきました。「すごい人だな！」と自分の感覚でピンと来た人に会うことから、学ぶことって、やっぱり多いです。

—「断られたら、どうしよう？」という不安はよぎらなかったのですか？

正直、ひるむ気持ちはありましたが、“会いに行く勇氣”を持つことを自分に言い聞かせました。「すごいなあ」と指を加えて遠巻きに眺めているだけでは、何も変わらないから。自発的にアクションを起こして、近寄っていけば、相手との距離も縮められるし、頭で考えるほど、難しいことではないと思います。

ただ、自分もそれ相応の生き方をしていないと、面と向かって、圧倒されるだけかもしれません。自分を裏切らないこと。そして、まわりも裏切らないこと。そうした当たり前のことができる自分がベースにあることが、まず前提かなと。



—今後の展望を聞かせていただけますか？

大きく分けて、二つあります。ひとつは、自分が培ってきた経験や、モノやコトを次世代の担い手たちに伝えていくことを続けていきたいですね。ファッション業界を目指す学生たちの指導に、今もあたっています。が、「これでいいのか？」「これからどうしていくべきか？」と真剣に悩む彼らの姿に、かつての自分を重ねることが多々あります。

自分の経験を赤裸々に伝えていくことで、「おまえもできるよ。がんばれよ」と背中を押すと同時に、今の自分の背中を見て奮起してくれるような人材を育てていくことができれば、最高です。

若者のエネルギーってやっぱりすごいもので、誰かひとりが強烈に呼応すると、まわりにもその余波は伝播して、いいことが伝染していくんです。それが、世の中にどれだけ広がるかということを見ると、「人生って、素晴らしい」と思わずにはいられません。

もうひとつは、映画を撮ることです。映像は、総合芸術とされるように、アート性だけでなく、物事をジャッジしていく感覚や、人を束ねて、引っ張っていく人間力など、多くの要素が必要な、壮大なプロジェクト。幼少期から“野球”というフィールドで培ってきたチームワーク力を生かして、40歳までにひとつ、納得のいく形にできたらいいなと思っています。

「運命とは、自分自身が切り拓き、作り上げていくもの」とあるという信念を物語るように、猛烈なスピードでフォトグラファーの道を登りつめてきたHiro氏。一瞬にして人を惹きつける引力を持つ、温かみのある口調と所作。それとはうらはらに、相対する者の体を突き抜けるような鋭い眼光を持つ彼は、最後にこんな言葉をくれた。「今、俺はものすごく幸せです。誰のことも抱きしめられるし、“最高だね！”って、誰と向き合っても言える」。力強く、人間への優しさに満ち溢れた彼の目を通して映し出される“真実の表情”は、世界を明るく照らし、

これからも、人々に絶大な希望を与え続けてい
く
ら
う。

